

墨子とは…

松本州弘

私的なことだが、墨子が好きだから墨子について私見を披露する。

夫と妻がいて子を成し、家を作る「家族」の形成である。この家族の家長は夫である。また気心のあった人々が寄り集まって一家を成す。

一家とは家族と同じで家長がいて、その家長が一つの絶対的思想体系を持ち、まさしく「一家」を形成し思想集団として膨張していくのである。

墨子は、「墨家」の長である。墨子は紀元前五世紀に中国に生まれた。

この頃の時代を春秋時代と呼ばれ、諸氏百家の時代である。

老子の道家・孔子の儒家・墨子の墨家・韓非子の法家等々。諸氏百家の時代に生きて彼等が活躍した時代とは春秋戦国時代である。大国が小国を侵し弱肉強食の戦国時代であった。諸侯は自国の富強のみを考え庶民の苦難など微塵も振り返ろうとはしない。

そんな時代である。勿論その時代にあっても広い人間愛と義によって、秩序を回復し混乱を治めようと生きた男がいた。それが「墨子」である。

墨子集団は儒家とは違い雲の上に顔を向けた思想集団ではなく、常に民衆に対し顔を向け続けた思想集団であった。墨子の思想は鮮烈である。その思想の主軸は「兼愛」と「貴義」である。墨子思想の最大の特色は「兼愛」の思想である。「兼」本来の意味は、「広大な」「あまねく」といった意味で、つまり墨子の「兼愛」とは「無辺に広く行き届いた愛」「太陽の如き愛」ということである。

これはキリスト教の説く「博愛」と同様の社会愛であり、また仏教の説く「慈悲」も同じである。墨子の時代よりキリストの誕生は後であり、仏教の中国への渡来は後世である。墨子は紀元前五世紀、春秋戦国の時代に既に無限の愛「兼愛」を世に示したのであった。

大乘仏教にある「慈悲」の心とは、古代中国の民衆が墨子より吸み上げた兼愛の精神に仏教指導者らが大きな影響を受け、仏教の教義に浸透したことは否定できない。墨子の兼愛の底流に清烈に流れるものは「他利の愛」である。

愛とは、自分だけのためだけにあるのではない。それは閉ざされた自己愛であって、決して本当の愛ではない。ただ永遠に自己の欲求が拡大する地獄でしかない。

自分を勘定に入れない大きな愛…広い愛…例えば家族に向けた愛…「人間存在の基本」

にそって家族の為に働き、そして家族全体の幸福を思い、隣人・地域社会へと兼愛の輪が広がる。この思いと行動こそが「他利の思想」の出発であると説く。墨子はこの兼愛の思想を前提に貴義の精神を解き実践する。

墨子の思想には反骨の精神が貫かれている。儒家思想には、権力者に向けた支配者階級に対するおもねりがある。儒家の思想は上のものを尊び支配体制を揺るぎないものにするに適した思想である。

春秋戦国時代は強者の支配する時代であり、強者に逆らう思想は強者によって粉砕されるのだ。抵抗勢力つまるところ戦闘集団を持たない儒家は、支配者に顔を向けた思想として普及した。こうした時代に墨家思想は、雲の上にいる支配者階級に顔を向けず常に大衆庶民に顔を向けた思想であった。であるから墨家の思想は、民衆への情意つまり人情を優先させ義を解き、義は大切なものであることを知らしめた。

墨子は、義を省みぬ者は人間として失格者だと言っている。

現今の一部政治家共にとっては、顔を赤くして俯きざるを得まい。

「大工が木材を真っ直ぐに削れなかったからといって墨繩を投げ出すようなことをしない。人が義をまっとうできないからといって義を投げ出せば、それは自分自身を放り出すのと同じ事だ」と言っている。己を支える精神は義であること。庶民の生活の中こそ義の尊さがあると門人らに説いて聞かせている。

「困っている者に手を差しのべる。」「弱きを助け、強きを挫く。」だからといって、困っている者や弱い者であっても困難に立ち向う意思、負けると判っていても立ち向おうとする意思を持つ者に対して、墨家集団は手を差しのべた。

例えば、大国が小国を犯す為に軍勢を向けた時点、小国の主が敗れることは判っても、小国を犯す大国に一矢を報いようとする強固な意思を汲み取れば、墨子は義をもって自らの戦闘集団を差し向け小国を助けた。

墨子一門による兼愛の知を以て義を行う「知行合一」の行動律こそが男気であり、その心意気が侠（勇氣）の精神である。他の者に対して広い暖かな愛情をもって「愛と義」を行う、この「知行合一」の精神こそが貴義いわゆる義のためには命を捨てても人に尽す、この心意気こそが侠であり「侠の精神」を貫き生きた者達の集団を墨家という。

墨子集団またの名を「墨家」と呼ばれた思想集団は、規律の厳しさが挙げられる。

この墨家の戒律の厳しさは単なる一家を支える物事、仕切の厳しさではなく義を遵奉することに向けての厳しさである。

そのことが、支配階級にない庶民の世界における貴義の世界を形造るのだ。

墨子の存在と思想は、春秋戦国の時代を画いた漢代の書物の中で各所に登場するが、墨子の思想は支配者階級に抗する思想として、墨家集団は秦の始皇帝の強大な暴威によって壊滅的蹂躪を受け、その後も支配者階級の手によって墨家集団は離散していく、その一部が東方の国：日本へ流亡する。そして遙か後の時代に至り、反骨者の精神の支柱である義の理（ことわり）として日本の侠（勇氣）達の心に生きづいている。

戦国の武将・上杉謙信は戦旗に「兼」の旗印を掲げ戦場を駆けた弱きを助け強きを挫く勇将であった。敵を追いつめ孤塁に墜ちた敵軍に「塩」を送り、兼愛を示し敵を以て感涙させた名将である。謙信も墨子思想を繙いた人であった。

墨子の「兼愛・貴義の思想」は仏教に生かされ、また三国志の世界において「劉備・関羽・張飛」の桃園義結の誓い、水滸伝梁山泊に集まる108人の義に生きた好漢達の活躍する小説に表現される「義の精神」の原型は、総て墨子に帰するのである。

この水滸伝は、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」のモデルとなって、日本の近世文学に大きな影響を与えた。

ことに日本に渡来した大乘仏教の慈悲の精神は、日本人の精神構造に「ものあわれ」「わび」「さび」などの優美・繊細な調和的情趣の世界を植付け、茶道・花道として日本人の世界に比類なき高尚な精神文化を形成した。

墨子の存在は中国の古代各文献に記載されているが、清代後期の学者の手によって墨子は詳細に組み立てられ、新たな発見として世に発表された。

以降わが国の碩学も墨子思想に取り組み、更に研究され中国の思想として学界誌や各出版社より発表されている（勿論、私も参考にさせて載っている）が、既に古代渡来した墨家の亡命者によって伝えられた墨子の思想は、墨家の俠達の血潮が、わが国の反骨の人々の胸裡に噴流し遺伝子となって、古代から現代の義に生きる人々と受け継がれ、多様化する価値観も併せもったのである。

義の精神の復活

一、 義の精神の意義

以下は、現代の日本を憂うが故に書いたものである。

今の世に墨子と墨家集団が存在したなら、日本の現状改革は至難ではなかった筈だ。世間では「アウトロー」とは、社会秩序からはみ出した者、あるいは無法者のことを言うが私の言うアウトローの意は、日本の社会構造の特徴とされる縦社会に反発する「反骨者」として心に鬱積を抱き、民意を押し潰す政治悪と横暴極まりなき官僚支配に立ち向かう心意気を有した者を指す。

東洋思想を究極の観点からみれば、それは墨子の「義の思想」と言うことになる。

世界思想は究極の思想としてそれぞれのものを配置し、その思想がいかなるものであるかを開示している。即ち、キリスト教思想は「愛」を究極にし、また仏教思想は「慈悲」を呼びかけ、社会主義思想は「平等」をテーマに掲げてきた。

わが国が基幹思想とするものは、歴史の過程からしても古典中国の思想である。

日本史二千七百年の歴史は、そうした古典中国思想を基底に配しつつ日本民族独自の民族思想を形成し、民族固有の伝統思想を形成した。

ならば日本民族固有の思想とは、いかなるものかと言えば究極に配置された思想は「義の精神」である。「義」の語源は論語であるが、義の思想的発展と拡大は墨子である。

中国より我が国に伝来した墨子の義の思想はその後「義理（物事の正しい道筋の意）」となり、庶民層に浸透し日本民族の中核的思想となった。また歳月を経るにしたがい、この義理が更に人情を加味するようになり、ここにおいて日本民族の伝統思想は「義理人情」に発展することになった。

「義理人情」は、庶民が日常的に使用する庶民の言葉となり「あ奴は、義理人情を欠く奴だ」「あの人は義理人情を通す立派な人だ」など、義の意義を庶民階級は軽快にまで日常生活の主語とし、自らの姿勢・行動を律していた。また武士階級の「義」を伝統的に受け継いだ層は、庶民とは違い「義」の貫徹を死生観の極致に置く男子の美学にまで高めていった。そう、私たち日本人はかつて、斯様な日常生活を営んでいた。

戦後、意図的にアメリカナイズされた大方の人達に、今どき義理人情の言葉を口にす

るのは時代錯誤と失笑されるが、民族的思想面よりみれば義理人情の思想こそが日本民族の伝統的思想と言えるのだ。

キリスト教思想の「愛」特に「博愛」と仏教思想の「慈悲」は説教的意味合いを伴うが、日本民族の伝統である義理の思想は、自然を理(ことわり)にした思想とすることになる。また「人情」に至っては自然法則に沿った思想であり、そこには仏教が説く慈悲なども混然一体となっている。

現在世界の思想の中で、これほどまでに自然のままの理(ことわり)を基幹に据えた思想はなく、その意味でも我が国が伝統とする義理人情の思想は今でも日本民族の魂の内に留まり、民族の存亡を賭ける時にこそ甦るのではないか：と思うことこそが哀しいのだ。それ程までに現代日本人の大方は、「義理・人情」を疎ましく放擲している。

義理人情の根源的墨子思想の波及は「力」を持つ者にとつては歓迎し難い思想である。このため経済の優位性を目標に定めた我が国は、国内は勿論のこと対外関係においても義理人情思想の排除に力を注いできた。

経済活動にとつて義理や人情は百害あつて一利無しの思想であるからだ。

要するに、経済至上主義者がよしとする思想は、弱肉強食の思想であり資本主義が最も歓迎する思想である。包括的に見れば、仏教を含めた東洋思想は「唯物論」を基底にした思想で、西洋とくに古代ギリシャを発祥源とする「観念論」とは異なるものである。

いま時、唯物論や観念論を思想の原点に配置すること自体、アナクロであるにしても東洋思想が源にする唯物論は、現代風に言えば科学であり、自然の法則に則った「理(ことわり)」を根幹にしたものである。こうした事柄を前提にすれば東洋思想が、要(かなめ)にする義も科学的な自然法則と言うべきである。

ロシアのトルストイ・ドイツのカント等多くの西洋学者たちが、十八・十九世紀中に新たな「人間のための思想」として東洋思想に注目したことは東洋思想が有する科学性であり、キリスト教理では解き明かすことのできない命題に関して明解な回答を開示しているからである。その命題の一端を披瀝するならば、キリスト教はキリスト教の教義に沿うことによつて人間としての存在価値があると説いているのに対して、東洋思想は人間がいるからそこに思想が存在しているのだと説いている。

このように分かり切った命題一つについても、キリスト教と東洋思想とは異なり、二千年続いたキリスト教支配が崩れかけた時点で西洋の多くの学者たちは、キリスト教の束縛から逃れ「密かに」東洋思想を研究し始めたのである。東洋思想は全ての面で論理的であり、「不可思議論」を全面に配したキリスト教とは異なっている。

この東洋思想が思想の中心に配す義は文字通り科学的であり、その科学を背景にした義こそ人間が自然のままに人間として生きることの法(のり)を示したものである。

したがって義とは、キリスト教の愛や仏教の慈悲を超えた思想であって東洋だけではなく、全世界人類に共通した思想と言うべきものである。しかも、この義に不可欠な要素は愛であり愛のない義は形式だけの義、ご都合主義的な義とならざるを得ない。

愛とはプラトンの言う観念論的なものではなく、極めて唯物的であると同時に科学的である。義が本当の意味での愛を包含し普通の思想となつたとき、義を越える思想は今後においても世に出てくることはないと思断じることができる。

二、不毛の時代を生きて

かつて我が国は、義を忘却し髪振り乱し、世界第一位の経済大国となつた時があつた。しかし、我が国が世界の経済大国になるために置き去りにしてきたもの、犠牲に供してきたものもまた多大である。そうした犠牲の最たるものは、民族が固有してきた「美風良俗」の語意に凝縮された多大なる伝統の喪失である。

いま我が国では、新たな次元から民主主義が問い直されている。

しかもその問い直しは、政治腐敗から出た政治不信に問い直しの原点を置いたもので、むしろ後ろ向きの問い直しである。本来の民主主義は国内における諸々の変革を足掛かりに、長い歳月を経て国民の総意として樹立しなければならぬ。しかし我が国の場合は、敗戦という大転機に他国からもたらされた民主主義に過ぎない。

このため我が国型の民主主義には至る所に無理押しの障害が残され、その弊害がこことあるごとに民主主義自体の不完全性を露呈している。

そうした弊害の最たるものが政治システムについての弊害である。

民主主義の原点は、その名の如く民意を基礎に置いた政治体制と社会の構成である。しかし我が国の民主主義はそうした民主主義の原点を単なる建前に祭り上げ、実際の政治は官僚主導で進められ同時に、その官僚政治は社会システムまでも官僚中央集権的に構成するに至っている。要するに我が国の社会体制は、直截的な民主主義ではなく強制的集団主義の社会体制に過ぎない。

我が国の戦後政治史を一望すれば、政権腐敗に彩られた政治史と見ることが出来る。しかもこの政治は、現在の政治にまで延長され政治とは腐敗墮落するもの、政治家とは悪い事をする人間としたイメージを国民に与えている。

したがって、我が国が現在の政治状況を変革しようとするならば、政治システムだけに変革の手を加えるだけでは充分ではなく、我が国が民主主義と思いいている民主主義そのものに大改革を施す必要がある。また「悪い政治の典型」として国際社会から見られている我が国政治の実態には、政治道義の欠落と言った重大要素が含まれている。

我が国の民族主義者陣営は、戦後一貫して民族伝統の復活を叫び続けて来た。

だが、こうした思想の復活をよしとしない為政者や経済界は、国民に対してこうした思想の時代錯誤性を呼び掛け、伝統復活を叫ぶ者たちを殊更に異端分子化することに意を注いできた。

他でもなく、既に最悪の局面になった政治と政治家の墮落は、政治家自身が我が民族の伝統思想とは異なる世界に身を置いたことの結果であり、同時に経済界が利益第一主義に暴走したのも、彼らが民族の伝統とは程遠いところに自らの座標軸を定めたことの結果である。戦後一貫して民族主義陣営が、民族伝統の復活を叫び続けて来たことは決して異端でもなければ、また時代錯誤でもなかった。

要するに民族主義者は、政治を含めた社会全体が現在の如くになることを恐れ、民族伝統の重要性を訴えるとともに警告し続けて来たのである。しかし民族主義者たちの並々ならぬ努力にも拘わらず、我が国社会全体は伝統復活を叫ぶ民族主義陣営を体制側の指導に従い、異端者と見間違ひ、時代錯誤の主張として排除し続けて来たのである。

確かに政治によって利益を収奪しようとする者、常軌を逸した企業活動によって巨利を貪ろうとする者たちにとって、義や道義を中核にした民族伝統の復活は邪魔な存在でしか有り得ない。このため民族主義者が主張する民族伝統の復活は、彼らの手によって封殺され代わって誰の耳にも快く響く「モノ・カネ」万能の音頭が国民の側に差し向けられた。こうした戦後の民族主義史を概観すれば、戦後の民族主義思想活動は「不毛の時代」と定義づけることができ、更に深くを見れば経済至上主義に民族主義者の伝統復活運動が敗北したことになる。

日本の歴史にとって、民族主義陣営が進めた伝統復活運動の敗北は決して好ましいことではない。なぜかと言えば、全ての局面で閉塞状態に立ち至った我が国を再生する道筋は、戦後一貫して民族主義陣営が主張してきた民族伝統の復活しかないからである。勿論、今後についても民族主義陣営が主張する民族伝統が、何処まで国民各層の間に受け入れられるかは未知数である。

しかし墨子が示唆する如く、人類にとって義を中心にした思想の存在が不可欠であることを考えれば、義の思想と言うべき日本民族の伝統は、これからの我が国にとっては是非でも受け入れなければならないものの一つである。

明らかに戦後の民族主義思想は不毛の時代を生きたと言うべきである。だが、新しい時代は伝統復活を叫ぶ民族主義陣営にとって決して不毛の時代ではなく、時代の環境も伝統復活を求める方向に傾斜している。

墨子は「義」を「貴義」と呼び、人間にとって義ほど大切なものはないとした。その義を根幹に据える民族伝統は、閉塞からの出口を見い出せない我が国の現状に、一つの示唆を与える何物かを有している。そこに民族伝統の意義がある。

三、 義の精神とアウトロー

墨子は人が真から死を選び得るのは義だけであると述べている。

簡潔の文体で知られる「墨子」は、内容を説明するために例え話を多用している。これもその例え話の一つである。

「お前に天下をやる。その代わりお前の命を貰うがどうだ」

「天下を貰ったところで本人の命がなくなれば、その天下も無用のものになってしまう。したがって何人といえども天下と交換に己の命を差し出す者はいない。

ことは天下だけの問題ではなく、この天下には出世や財物のことも含まれ、だから人間はこれから手に入れたいと考える事柄について命と交換はしない」と言う例え話である。

しかし墨子は、そうした出世や財物とは関係がなく人間が自ら進んで命を差し出すものがあると言っている。即ち、それが「義」のために死ぬことである。

また墨子は、義があっても義の為に命を賭けての闘いから逃げ出す者と、義を売り渡した人間を非人と定義している。ここで墨子について特に注目して置かなければならないことは、義には利が無ければならないとしたことである。墨子と対立していた儒家は「利」を嫌悪し、利のために命を捨てることを最悪の所業と位置付けていた。

しかし墨子は、利のために命を絶つことが最高の死だとし、そこに義利の言葉を当て

ている。つまり、自分の利益のために我が命を絶つ者はいない。

前記した例え話ではないが、例え天下を貰ったところで自分が死んでしまったならば何にもならない。従って、利のために自らの命を絶つと言うことは、必ずや他に「利」があるからだと言い、それが即ち「他利」の思想であり、自分以外の者の救済の為に自らの命を絶つと言うのである。

単に一般的な意味での義による死では大死になってしまう。自らの命を絶つことによって他の多くの人達を救うことができる死こそ本当の義死であり、他人のための役に立つ死であると言う。これが墨子の言う誠の「義利」であり、本当の死とはこうしたものでなければならぬと言いつている。死を賭してまで他人のことを考える。

要するに、これが墨子の「兼愛思想の根本理」である。こうした墨子の死に関する思想に対して、儒家の思想には根本において異なるものがある。概括的にみれば、儒家の死は「義死」に集約され、他人のために自らの命を絶つことを否定している。

自分だけのために死ぬ：自らの義を全うするだけの為に死ぬ：要するに、これが儒家の死に関する思想である。

墨家の死に対する思想・儒家の死に対する思想についての解釈は、それぞれの思想の持ち方によって異なるものがあるにしても、墨子の思想が徹底して「他人のことを考える」思想であったことがこれで分かる。確かに一直線に義の為に死ぬことは、男の美学に通じるものを有しているが論理的に見て行けば、多くの者のために死を選ぶことが本当の死であることは言うまでもないことである。

死に到達しないまでもこうした事柄は、誰彼の別なく日常茶飯事に起こり得ることである。そこには究極の命題として、自分だけのために生きるか、他者多くの者達のために生きるかの問題が出てくる。同時にこのことは墨子思想に連なって生きるか、儒家思想に基づいて生きるかの問題も出てくる。更に視野を深度化すれば、墨家型の生き方は横に広がる人間関係の中に己の存在を置き、己がいかにほどにこうした横との繋がりのうちに義を貫き通すことができるかを見出そうとする生き方である。

これに対して、儒家型の生き方は、社会の有り様を縦の関係でとらえ、例えば上司や部下との関係：年長者や年少者の関係：親と子の関係：更に君主や家来との関係：で捉え、この縦構造の中に己の立場を置くとする考え方・生き方である。

我が国は徳川時代以降「儒教」を国教と定めたこともあって、人それぞれの生き方もここに託された儒家型の生き方に定められ、この生活規範に反する思想を持つ者や生き方をする者たちを「異端者・無頼者」などと決め付けることに徹した。

蛇足になるが、西洋にもこうした墨子型儒家型の考えがあり、そうした相互異なる考え方に一定方向の指針を与えたのが「キリスト教」である。

通常、キリスト教のシンボルは十字架とその十字架に掛けられたキリストである。磔になったキリスト像と人々は認知しているが、これは物語の上でのことに過ぎず本来の十字架は前記した横平面の人間関係と縦である。縦面の人間関係を表し、人が如何にしてこの横と縦の関係を無事に生きるかを表したものである。

人は社会の横面に焦点を置くか、縦面に焦点を置くかによって生き方は定まる。本来ならば「キリスト像」の如く横縦平均に焦点を置き、生活することが最良なのであるが、そうはいかないところに人間自身の「本性」がある。更に蛇足を加えるならば、中国古典思想の一つである「道学」はこの人間自身に課せられた大問題に対して明解とも言える答えを出している。それが即ち「無の思想」である。

本書は、墨子に関する書き物であることからして道学については敢えて触れないことにするが、以上を要約すれば社会の優等生とアウトロー（反骨者）を区別すれば、この横型の生き方：即ち墨家思想と縦型の生き方：つまり儒家型の生き方の違いが出てくると言うことである。生き方の違いに決して優劣はない。

自ら体制側に組した生き方を選択し、その生き方を貫き通すことが可とするならば、社会の優等生になって人生を過ごすのもまた可である。若しそこに違いがあるとすれば、こうした生き方に義をないがしろにする生き方を否とする自覚を持って生きるか、無自覚に生きるかの違いだけである。

自らの生き方を自覚し、その生き方の故に義の精神を会得したならば徳川幕府時代以降、異端者・無頼者と決め付けられ続けて来たアウトローにも、アウトローとしての品格が付与され社会の重要要素としての役割を担うことができる。

体制側がどのように言おうとも、また社会の風潮がどうであろうとも歴史を通して演劇や映画の中で演じられる「侠客」は、庶民の喝采を受け同時に支持され続けている。そうしたことの理由は、劇中の中で演じられる彼らが共に自らの生き方を自覚し、その生き方に沿って義の精神をその所作行動の中に表しているからに他ならない。

劇中の国定忠治然りであり、大前田英五郎・清水次郎長然りである。

「世間」からアウトロー・無頼者と呼び捨てられて来た人々にも、その根を探れば社会の優等生以上のものがある。要は、そうしたアウトロー・無頼者だけが持つ「美点」

をいかにしてアウトロー・無頼者自身が自覚するかの問題である。

墨家集団には、墨子の至言によって心を洗われた多くの「庶民・無頼者・博徒一門・刑余者」が参集した。

墨家集団が中国春秋戦国時代に二百年余りに亘り輝ける歴史の一ページを飾った事実は、斯様な集団の存在が政治と結託した大資本家共が牛耳る権力社会に踏みにじられた弱者である大衆にとって、その存在が今の時代に至っても必要不可欠であることを証明している。

四、 義の精神の自覚と実践

中国古典の「老子」に次の言葉がある。

「学を絶てば憂いなし」・「読書は憂患の始めなり」

また「礼記(儒教の経書で五經の一つ)」には次の一文がある。

「玉磨(みが)かざれば器(うっわ)を成さず、人学ばざれば道を知らず」

「老子」と「礼記」は一つの問題について、全く異なったことを言っていることになる。「老子」は学ばない方が良いと言い、「礼記」は学ばなければ道を知ることができないと言っている。さて、このうちどちらを取るかは人生上の大きな問題である。

(注・以上の説明は表面的なもので、結果としては老子も礼記も同一な事柄を言っている。

その肝要部分中途半端な学びには、百害あって一利なしと言い、学ぶ以上は真剣になつて学び取れと言うことに尽きる)

人生にはこの二つの異なった生き方があり、またこの生き方通りに人生を送る人たちがいる。老子が言う通り、いろいろなことを知れば知るほど不幸になるとした一つの定まりがある。ならば知らなければよいでは無いかとして、無知無学のままで人生を過ごし、結果として不幸な一生に生きる人たちもいる。

確かに、義も道も知らなければ勝手放題したい放題のことが出来、不義や不道德に悩むこともない。これは老子の言う「学を絶てば憂いなし」である。しかしこれで良いわけがないことは万人が知るところである。何事においても人は学ばなければ成長せず、

知ることによって成長もする。このことは「玉も磨かなければ器にならず、学ばなければ道を知ることができない」とする礼記の一節通りである。

要するに、人間にとつて学ぶことは成長の糧であつて、学ぶことのない人間は人間の形をした動物にすぎない。いろいろなことを知ることが、同時に色々な憂いや悩み事を抱え込むことになる。しかし人間は、そうした知識故に生まれた憂いや悩み事を、ひとつひとつ越えて行くところに確立された人間へと成長していくのだ。

文字通り義について一片の知識を持たない者や義を知りながら横を向く者は、本書が取り上げるアウトローではなく、単なる人生の溢（あざ）れ者で墨子流に言うならば非人間である。

このため物語や芝居に出てくるアウトローは少なくともアウトロー社会の義について一通りの知識を持ち、その知識に沿って行動している。ここにアウトロー永遠不滅の理由があることは改めて言うまでもないことである。知ると言うことは、自らの苦悩を抱え込むことではあるが、この苦悩をいくつ越えたかによつて「人格」も定まる。

苦悩を抱え込むのが嫌だと言つて生きる上での責任回避ばかりしているならば、アウトローだけではなく社会の優等生だと言われている連中までも、正常を欠く非人間にならざるを得ない。とくに墨子は「反骨」の精神を抱いて生きるアウトローに「義に徹し、たゆみ無き人生を歩め」と教示している。

儒家風の縦社会に生きる者は敢えて学ぶ必要はない。なぜならば彼らは上から指示されることに忠実に従つていればよいからだ。常に自らを創り出して行かなければならないアウトローは、そうした意味でも「大いに学び：大いに研磨して」行かなければならない。知のために苦悩することは、同時にそれだけ人間が大きくなったことの証である。

我が国は儒学的な論理に従い、縦直線的な道を戦後歩み続けてきた。即ち、この道筋を一言で言えば米国追従の道程であつた。力のある者に従うとしたこの道程は一方の見方からすれば成功した。

しかし、これからの世界が横平面的な広がりを要求する時代になった場合、縦直線的な国家の歩みが適用するはずはない。そうしたことからしても、これからの我が国は単に外交分野だけではなく国家のあり方自体にも大いなる変更が要求されることになる。

即ち、その新たな道筋とは、学術的に言えば儒学的な道を廃して墨家的な道に入ることであり、政治的には対米一辺倒に修正を加え世界各国：大国か小国の別なく平等に国交関係を持つことである。一流の経済大国にして政治は三流と言われる現在日本のあり様には将来的な危険が秘められている。

そうした現状を打破するためにも我が国の政治は、墨子の提起した「兼愛思想」に学ばなければならぬ。個々人の生活にとつても「墨子思想」の存在は力強い安心感を与えるのと同じく、国際社会においても「進んで助ける」兼愛の精神を有した国家の存在は国際社会を平和に導く鍵である。

五、 自己の原点回帰運動

キリスト教中興の祖と称されるアウグスチヌス教父（四世紀）は、

「知った方が良いか、知らぬ方が良いか、どちらを一つ選ぶとしたら、勿論、知った方が良い。知ったことがもし自分の意に沿わぬものであったならば捨てれば良いのであって、最初から知らぬでは捨てることも出来無いではないか」と説いている。

この言葉は単に宗教上のことだけではなく人間を取り巻く全てのことには当て嵌まる。人は誰しも青春という時代を経て成人する。この青春時代の生き方、生活の仕方が大事であることは多くの賢人たちが指摘する。青春時代の特徴は大いに知ることにある。だがこの時代は、知れば知るほど社会の矛盾が目に見えるようになり「ある者は憤り…又ある者は苦悩し…又ある者は挫折したりする」時代でもある。

こうした経験を経て大多数の若者たちは、では俺の働きでこの矛盾を解消してやろうとする気概を抱いて大人の世界へと仲間入りして行き、大人社会で大半は潰され悪政に跪く柔順な社会人となる。しかし少数ではあるが青年時の気概を捨てずに、初志貫徹とばかりにめくるめく社会の矛盾に対峙して行く者が、包括的意味でのアウトローとなる。

世界史を通覧しても「世直し運動」の多くはこうした者たちの気迫と情熱によつて達成されている。彼らがそうした行動に出る意識は社会観の純粹さにあり、その純粹さを支えるものは「兼愛」的な志（こころざし）と情熱である。

「ずるい」政治の要点は、そうした若者たちの純粹さや情熱を削ぎ社会の矛盾を感じさせないまま、若者たちを大人社会に組み入れてしまうことにある。

そうした社会状況を造るために為政者は過度なスポーツ振興策を取ったり、芸能など若者が好むものに力を入れ、若者の知的感覚を麻痺させる政策をこれでもかこれでもか的手段で推進する。他方「良い」政治は、若者が抱く純粹な社会観を大事にし、政策的にはその純粹さを育てる教育システムの充実に力を入れる。

そうして育った若者たちに次世代の社会を担わせる方向に政治の大筋運営を行うことである。改めて言及するまでもなく、我が国現代の政治は「ずるい」政治の展開が主流で、若者たちの知的感覚・若者だけが専有する純粋な社会認識を削ぐ為の政治を進めている。

大胆気鋭な若者を育てる政治を強力に進めたところで、その若者たちも大人になればいつの間にか「物分かりの良い」大人社会の一員になるのが一つの社会法則である。

国家的次元から見れば、国家の将来にとって大事なものは若者たちと、その若者たちが持つ気迫と情熱である。カネとモノとイメージだけにしか興味を持たない多くの若者たちの湧出は、戦後米国に追従せる我が国の意図的誘導の結果によるもので、日本の未来を考察すれば政治に限らず社会全般に取っても大問題である。

政治が如何に現代を安穩に維持しようとしても、その安穩維持のために若者たちの気迫や情熱が犠牲に供されるとするならば、これは正に国家的損失であるばかりではなく、自らの存在を保持するために政治が恣意的に若者たちの純粋さや情熱を削ぐとしたならば、これは政治による体制犯罪である。

気概や気迫、純粋さや情熱また挫折や失意までもが次に何か新しいものを創造するための糧である。世の中は、決して体制に誘導された優等生と生気を失った者たちで構成されているわけではない。視点を変えれば我が国、二千七百年の歴史を通して堅持されてきた男性優位の社会構造を崩壊させ、男女平等の現体制を造り上げようとする現代女性のパワーは、日本史上からみても明治維新に匹敵する大業である。

女性にしてかくあるとするならば、男性が如何にあるべきかは、押して知るべしの事柄である。政治がそして教育が如何にあるかは別にして、気概や情熱と言った精神上的の構成要因は若者たちに共通したものである。また既に失ったとは言え、青年時代に自ら持ち得た気迫や情熱は現在大人と呼ばれる者たちの心中深くに秘められ、その疼きにも似た郷愁を感じている者も多い。即ち、その若かりし頃への郷愁こそ横面社会に生きようとするアウトロー魂であり、現状をよしとし得ない反骨魂である。

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」と読んだ文豪・夏目漱石にしても、若かりし頃の情熱を失った大人の感慨の悲しさ哀れさを嘆いている。

夏目漱石かくありとするならば、他の多くの平凡人が大人社会の哀れさを嘆くのは当然のことである。少なくとも現代人の大多数は、生きることの目的意識を失っていると

言われている。その最大理由は人として当然に持つべき情熱や気概と言う精神構造上の要因の発露を抑圧される社会に生活していることである。

即ち、智に働けば角が立つ：情に棹させば流される環境に置かれているからである。学術的にはこうした社会を「閉塞社会」と言い、社会構成上最悪の社会と定義している。最悪社会に生活しなければならぬ個々人にとっても、こうした状況は過酷であるばかりではなく国家社会にとっても損失である。そして今、そうした過酷社会を打破し得るのは社会のあらゆる階層に内在している反骨者たち、精神的アウトローたちにほかならない。

人類学・民族学的に見ても日本民族の原点は「横面社会人間」、言葉を飛躍すれば反骨精神にある。政治にしてもまた社会にしても反骨の気骨を有した者の存在は不可欠な要素であり、反骨者を欠いた社会に緊張はあり得ない。

そうした社会構成上の視点から見れば閉塞された現代社会を変革するために必要なのは、日本人の大多数が精神上の原点とする「反骨の魂」を再び取り戻すことであり、その原点を最大拠点にして壮大な社会の改革運動を進めることである。

前記した如く単なる反骨は思想的背景を持たない反骨にすぎない。

反骨が真の反骨心に昇華されるには反骨心を支える義の思想がなければならない。

即ち義の本意は、「自分のことを考えず、義のために行動すること」にある。これを墨子風に言うなれば「去私」であり、また「他利」であり、その思想の行く所として兼愛の思想がある。全てとは言わないまでも、多くの人たちが自分のことを二の次にして、他人のために何かを尽す働きをすれば、釈迦が苦の世界と定義した人間社会も大きく変わってくる。

要するに、これが義の本義であり、「共生の思想」に他ならない。義は十六世紀の昔、ヨーロッパにおいて「心意気」と解されている。その心意気とは反骨者たちの思想真髄であつて、もともと心意気のないアウトローなどは存在しない。兼愛思想、同時に義の精神が難解であるならば、少なくとも人間存在の原点である心意気だけでも回帰させる必要がある。

心意気によって結ばれた社会…心意気が通じ合う集団組織の出現は社会全体の構造を変えるだけでなく、生きる目的や意義を失った人たちに生氣と活力を取り戻す糧となる。そうした意味でも私はここに声を大にして、自己の原点回帰運動を提唱する。

戦後の既成概念を正し「義によって支えられる社会」「理（ことわり）が通じる社会」「人情が重視される社会」の出現は、きつと閉塞社会に生きる現代人を変えるものと私は信じている。